

### 三鷹・新川の居酒屋にて

土工Bは、突然、隣で呑んでいた四十がらみの、やせておとなしそうな商人肌の男を椅子ぐるみ叩き伏せた。Bはソラ豆のツマミを噛み噛み、俯向けにつんのめった男を平然と眺めていた。「何すんだい」。件の男は間が悪そうに立ち上ると、つき倒した土工Bに詰め寄っていった。だが、その声は弱く、すでに完全に土工Bに威圧された形である。

案の定、Bの向こう側でこの一部始終を赤らんだ顔で眺めていた土工Aが「俺の兄弟に恥かかせつと、テメエの頭をブチ割るぞ。来るなら表へ出る」と言つて威勢よく立ち上がると、この商人風の男は、口をモグモグさせて、わけのわからぬことを呟きながら、やにわに今まで呑んでいた焼酎のコップをとつて、猫のようにすばやく表へ逃げていった。コップには半分も入っていなかった。

この土工AとBは、僕が友人に誘われるままこの酒場——と言つても場末のうす汚い飲み屋だが——に入ったとき、すでにかなりできあがっていた。僕らが呑み始めると、特有のブッキラボーナ調子で話しかけてきた。僕を現場監督の某氏と間違えて要らぬ愛想を使つたり、背広で働く人間への羨望をブチまけたりしていたのである。

とくに僕が気に入つたのは彼らの社会批判であった。それはすべてにおいて正しかった。なかでも土工に対する世間の冷たい差別的扱いに対する批判は、粗野な言葉ながらふかい切実感がこもっていた。

「土方だからつて、なんで差別するんだい。何わるいこと、したつてんだ。どこへいったつてまともに扱いやしねえ。バカにしてる！ こないだもなア、乾物屋へ行つてツケで買わせるつて言つたら、土方の人はゴメンだとコキやがる。もう三年も顔見知りのクセにだ。こんな文句つてあんめえよ」。土方Aは絶叫するような調子でしゃべつた。BはAが自分の気持ちを代弁してくれるようなことをしゃべるたびに、酒を注いでやつていた。

「背広の野郎を羨ましく思うよ。ハラも立つがよう」「好き好んでこんな仕事やつてんじゃねえ。一ぺん土方になったら抜けられねえんだ。いまさら家へ帰つて百姓やるわけにもいかねえ。第一もう土地がねえ。死ぬまでこうして渡り鳥よ。いつになったらカアと二人で暮らせるかもわかんねえ。くそいまましい！」

こんなことをのべつまくなしにしゃべつては、僕らの同意を、その表現の荒々しさに似ず、心ではかなしくも求めているようだった。僕は陽気に、そして親愛の念をこめて、そのすべての不満ややるせなさについて同意と共感を示した。彼らはいささか満足したようだった。

そこへ、突然この出来ごとである。始めは何か起こつたのかよく分らなかつたが、聞いてみるとかの商人風の男が、土工Bのすすめたバットを断つたからと言うのだ。

「奴はバットなんか喫えねえだよ。たとえ喫えなくなつて、ともかく一旦は気持ちよく受けて、そのあとで捨てるなり何なりしろつてんだ。土方をバカにするのもいいかげんにしろつてんだ。土方だつて人間のエチケツト位知つてらア」と言うのが土工Bの

言い分である。

しかし、僕の見たところ、この商人風の男は、ピースや光が口に合っていて、バットなど喫えないといった男ではない。ただほんとの遠慮から断ったに違いないのだ。

帰りぎわ、土工Aは僕らに向かって言った。

「あんた方は人間ができてる。俺たちを嫌がらず、ふつうに話してくれた。俺たちと平等だ。世の中皆こうなら苦労はねえ。俺は昔、中央線の熊と言われた男だ。傷害罪でブタ箱にも入った。でも、もうバカなマネはしねえ。何やつても損すんのはダメエだからな。アバヨッ」

二人は千鳥足で飯場の方へ消えていった。

(一九五五・一一)